

「新代」(1)-115下 紀下396P 30/12 = 2.5

新代(4)-111頁

2,518-1/2

14世孫 紀上214P 2行 神武紀

統紀(6)-44P 紀上590P 注6 野見宿禰 紀上266P ③33/2P 1/3 同文

新 紀1571年 328 243年

14世 209/世代 280年 何れ合う

少彦名と野見宿禰

● 続日本紀、天武元年六月条や、姓氏録、山城神別、和泉神別、土師宿禰条には、

「天武日命十四世孫、野見宿禰」

とある。ハ「日本書紀」(上)日本古典文学大系

岩波書店、五九〇頁、補注六一六参照

● つまり、天武日命の十四世の孫(野見宿禰)

である、という。 か 垂仁天皇の御世の

● ニニに、「少彦名」の倒語(神武紀元年正

月条参照)である。日名彦少と、日野見宿禰

とを、

① 日名彦・彦・少

② 日野・見・宿禰

といったふうに並べ比べてみると、非常によく似ているように思われる。

● 因みに述べると、

(1) 天武紀元年六月二九日条に「佐味君宿那麻呂」

(2) 天武紀元年七月一日条に「佐味君少麻呂」

* 「新代」と「新代」(1)-115下 と同様にして下さい。 の位置を揃える。

156 紀上660P 次頁18 紀上266P ① 273

垂仁7年
欽明紀の元年日540年
550
300
250
250
14 = 17.85

野見宿禰 紀266

2,518^D - 2/2

ちえい「新」(1)-115P上
知史

紀F401 287
新(1)-115頁

佐味君少麻呂

とある。(「荒筋第一編」出雲国の国造「」において既に)

すなわち、「宿那」と「少」とか、全く同一

視されている。と分かる。

と「たことなどを考え合わせると、

天穗日命は「知恵者」山崩彦(久延毗古・栗山

子)の提言にしたがって、自らの名を隠し、

奴彦宿禰の倒語である「少彦名」(「宿

禰見野」をもつて名としたのであろう。

と想像される。

その後、「倒語」を用いる必要性が無くな

ったとき、

天穗日命の子孫は、晴れて「野見宿禰」

を名乗った。

のではなからうか。

そして、天穗日命の子孫は、

野見宿禰の襲名してゆき、

垂仁天皇に相当する欽明天皇の御世の十

四世孫、野見宿禰に至った。

の「だ」として「み」たい。(第一表参照)

なお、天穂日命が三〇〇年頃の人で、十四世孫の野見宿禰が欽明朝
半は(五五〇年頃の人だとすると、一世代は、ほぼ一八歳となる。

14世孫 紀5590
F34

157

2515^D - 2/2

大己貴少彦名
⑤2579P14

2,519P

紀上128P 12~13年
初(里)74P

紀上128P
元(里)74P

2/4 正 2/4
2/5 2/3

*

大己貴(葺根)冬衣は、少彦名を迎えて
天下の経営に、より一層の力を注いでいった
邪馬台国から降ってきた
という共感があったからであろ、
二人は、力をあわせ、心を一つして、この国
を作り堅めていったのだ。 (神代記・神
代紀参照)
しかし、いまは、二人の国作り心のあはれに
水を語って、いる場合ではない。
西域の倭国が示した目を見はるばかりの快
挙について、述べなければならぬからであ
る。

60P 前 ②511 ③244

③2508P 末 ③2509 ②520P ③2511P ③244

③2508P 末 ③2509 ②520P ③2511P ③244

③2508P 末 ③2509 ②520P ③2511P ③244

三韓征討

④ 三国志 魏書、弁辰（弁韓）条に

この国は鉄を産し、韓、濊、倭がそれ

れ、ここから鉄を手に入れている。物の交易に

はすべて鉄を用いて、ちようと中国で銭を用

いるようであり、またその鉄を樂浪と帯方

二郡にも供給している。三世紀半ばの三王の

高句麗は、西晋滅亡直前の三二三年に樂浪

郡を占領し、三二四年に帯方郡を占領した。

（新羅）を属国としたように思われる。（既述）

（新羅）を属国としたように思われる。（既述）

弁辰（弁韓）に対する不用意な手出しはな

かなが出来なかつたに違いない。

（新羅）を属国としたように思われる。（既述）

遼東郡の慕容廆と倭国との挾撃を自

ら招くことになりかねないものである。

とはいえ高句麗が、弁辰の鉄口を、指を

くわえてながめていた筈はあるまい。

ついに高句麗は、その鉄口の利権を独占

③2508P 末 ③2509 ②520P ③2511P ③244

大 用 有 三 韓 征 討

②508
3/6年に西
と2の口の人か
②531

百載・新羅は旧2小国
古代朝鮮 69
②531

古代朝鮮 井上香 66
「刺て海を渡り...」
②510 1/2

ふんまん
憤懣云 1982
②521
②510 3/2 好大王碑文

うん
三國史記 (2) 122 119

返すか「それとも止むなきものとあきらめるか」
の判断の岐路に立っていったといえよう。
だが「弁辰」(125)の鉄の取得権を奪回する
為には、当然の如く、倭国は
高句麗・百濟・新羅の一大勢力を敵にまわし
て戦わなければならなかった。
「倭国に、これら三国を討伐するだけの力
があるか」
海中の倭人達は、憤懣やるかたない思いで
海のかなたの海北の国々の方を見つめた。
晋(西晋)が三六六年に滅びて三年後の三九九年
(現在の遼寧省および朝鮮西北部一帯)の刺史(州の施政官)
とそんな時、期せずして、好機が訪れた。
樂浪・帶方二郡を滅亡させ、百濟・新羅・加
羅を属民とした高句麗の関心が、遼東郡へ
の進出に向かったのである。
三九九年、平州刺史東夷校尉崔毖は、慕容
皝が遼東郡を含む平州の実権を握っているの
を快く思わず、ひそかに高句麗や鮮卑族の
段部や宇文部と結託して慕容皝を亡ぼし、平

202
119

鮮卑
②508 159

161
吳漢
大和
426

てうす
手越 1519

高麗は、336年に百済に朝貢した
但し、331年の後を以て死する
2.522

鄭
小林頼の
地図

後趙 東魏 236
古代朝鮮 69
250

東魏 357
晋 1140
250 五胡十六国

小排 99
317~420

州を分割統治しようとした。
しかし、崔暉は戦いに破れて高句麗へ
逃れた。
この時期は、建業に都を置く。東晋は三
一七、四二〇の時代であり、中国北部は異
民族の武力抗争が続く。いわゆる五胡十六国
（三一、四三九）と称される時代である。
高句麗は、これらの戦いに敗れた亡命者を
迎え入れ、国政を整え、軍備を拡張した。
そして三三〇年に高句麗は後趙（三一
九）の勢力拡大を外交的に抑制しようとし
た。（「古代朝鮮」井上秀雄、日本放送出版
協会、六六、六九頁等参照）
ともあれ、高句麗の力の多くは遼東郡
の慕容廆の方へ差向けられたものと思われ
る。
高麗の兵達も、続々と北へ向かて行くぞ
高句麗の兵力が手薄となった。今こそ願
うて、またとなない絶好の時よし

う 征つ 紀上340^P 未所
室の国 紀上340^P 5行

2510^P - 1/2

市杵島姫 新羅征討 紀上185^P
2512^P

井上294^P 紀上334^P
海 紀上194^P
三韓 197^P 2,523^P

日本書紀 534^P
天つ子 改行
香椎 紀上334^P

新羅(辰韓)、百濟(馬韓)、
句麗を討とう。討って寶の国の利権を確保し
ようではないか

それは恐らく、辛卯年(三三一)のことで
あつたらう、と想像される。(広開土王陵碑

参照)

ここに、仲哀九年(二〇〇)十月に初代神功皇
后、あの辰韓(新羅)征討の故事にならう

五代目の天照大神(市杵島姫)を守り神と
が為さる

する忍穂耳尊(元神天皇)の軍は大挙して玄海
難を押し渡ってゆくこととなつた

「我が強兵たちよ。天照大神と共にこの倉
海を渡り、財土(新羅国)に攻め入るなら

は、必ず、かの地はこの倭国のものとなるで
あろう

もうすでに、橿日浦は倭国中の船が集ま
つてきたのではなからうか

数の船で埋め尽くされてゐた。思われればかりの無
船上に色とりどりの旌旗が翻り、男たちの

黄色の軍旗をはいめとする

④ 2521⁻ 1/2 来7. ↑ 来ソッテ
海を渡り ↓ 渡リウ

太いゴツ⑤ 2531⁺ 3行にも海を渡って、た
たか なみ
~~山~~ 浪 紀上334^p

⑥ 2510⁻ 1/2 中樞元1443^p

..... 2,524^p

コクヨ ケ-20 20×20
臣民といた ⑤ 2530 11行

天つぎ
改行

紀上336
井上(四)297 2,525

56.4.19(土) 紀小196 せんほうえ
2643 先鋒1276
大正初年 1894

れよとばかりに漕ぎに漕いだ。
掛声を合わせ、猛烈な漕ぎ渡って行くその勇
壮な様は、
功皇后の偉業の時と、まさしく同じだった。
すてに出されて、いた神の教えは、
和魂は、王の身について、寿命をお守りす
る。其魂は、先鋒となつて軍船を導くであ
う。
というものであった。
この時、風の神は風を起こし、波の神は波
を起こし、海の中の大魚はことごとく浮かん
で船を扶けた。
すなわち、強い風が追風となつて吹き、
波の流水に乗った船は、櫂を使わないで新羅
の浜辺へと突き進んでいった。
船を浮べた波は、遠く新羅の国の中にまで
も満ちあふんだ。
天神地祇が助けになつて、いるからだ。
と、人々は思った。
一、方、思ひもしない、虚を衝かしたとはい
え、
新羅王は、毅然とした面持で

由2531 95
不意を突く

早さで

云々496' ときの声 **改行** 2526P の乗上げる 1752' 物云2195' 船が三ヶ所に乗り上げる

兵卒等に命令を下した。
倭国の者共に、今度こそ思い知らせや
るがよい。迎え撃って、徹底的に敵きのめし
てしまえり。

だが、倭国軍の攻撃は凄まじかったや

新羅の兵達が射放つ降るような矢をも物
ともせず、命知らずの倭人等を乗せた船は
勢い余って、陸地の奥深くへまでも乗り上げ
ようやく止るといった有様であった。

剣や鉾や

そして倭人達の戦いぶりには、驚かされる津
波のようなものであった。

新羅軍を蹴散らかし、あつという間に浜辺

一帯を奪取してしまつた。

新羅軍も必死である。

攻防戦が繰り広げられていった。

と、その時、倭国軍の後方に一際高らかな

喊声か沸き起つた。

荒魂を乗せた船が海から引き上げられ

そして何と、担ぎ上げられたのだつた。

男玉 108P 134P 2,527P
 「北門の龍」 108P 134P
 日本戦記 534P

リゆうせん 竜船 232P
 リゆう 小珠 1118P
 龍舟 天子の乗る船
 龍を指した船
 ようく いかにも...のよう

その船は、大勢の倭人達の肩の上にあつて
 まるで波間に漂うかのよう揺れながら、御
 輿よろしく練り出し、じわり、じわりと
 新羅の主軍に向つて進撃していった。
 「なんだなんだ。あはは一体どういうこと
 だ。見よ、こちらへやって来るぞ」
 新羅軍のうちに、響動めきがあった。全く
 為体の知れない無気味なものを見るような不
 安が、兵達の心の内に広がった。
 「やあ、あの船の上に立ちあがつたのは誰
 だ」
 龍船の上には、おかーがたい威厳をもつ
 て、敢然と采配を打ち振る忍穂耳尊（心神天
 皇）の雄渾な姿があつた。そしてその胸元に
 は、しっかりと抱きかかえられ、龍神の玉
 日男玉が、しっかりと抱きかかえられていた。
 「龍神・天照大神の荒魂、朝満瓊はこ水
 なるぞ。我々の上には、日御子の御加護が
 あるのだ。戦いには勝つ。我が軍は勝つ。者
 共、存分に戦うがよい。それ行け。突撃せ

檀尻・山車・山鉾

2530P
 予

$$= 338^p$$
[illegible]

2,529^P-1/2

わかれおえ
我に帰る
22385^P

紀上338^P18行

紀上337^P末

経2R...
1442-1/3

第8章1442
774-6/9

といひ、いひ、いひ、その御樋代を納めし具を御船
代^いと^いいう。御船代は、形状が船に似てゐる
から名づけられたものといわれる。(「玄辞苑」
へ御樋代へ御船代)第二章「^いの^い参照」
旌旗が日に輝き、鼓吹の聲が起こつて、山
や川が残らず振動した。――そう思えた。
新羅の王は、遠くから姫の凜凜しい姿を望
み見て、突然襲つてきた軍はまさに己が国を
滅ぼそうとしてゐると思つた。そうして恐
怖のあまり、氣を失つた。
は、
「私は、東南に神国、邪馬台国が有り、ま
た聖帝^{せい}倭王^わ（^い衣神天皇^{いじんてんかう}）が
おられると聞いてい
る。必ずその国の神兵にちがいない。どうし
て兵を挙げ、防^ふぐ（^いことか）できようかし
と言つた。
・尚、神功皇后摂政前紀には、新羅王が
「吾^{われ}聞く、^い東^{あづま}に神国有り。日本と謂^いふ。
亦聖王有り。天皇と謂^いふ。必^{かならず}其の國の神兵

2.529^P 2/2

広503^P 卷え

ならむ。登兵を挙げて距^{ふせ}ハけむや^{OK}

と言ったと記されてい^る。

●^{たぶん}恐らく日本書紀編纂時の通念^{つうねん}に従^{したが}い

日東^{ひとう}日本^{にっぽん}天皇^{てんおう}という字に置きかえ

ているのであ^{らう}と想察される。

*

ヤ子母ニ
小鈴 2527

矛と(宗家の)鏡
2572-3/3 因

紀上338

紀上338 613
井上(上)

2,530

原氏 2510 1/2 2670 同文
臣民 -1/2

紀上338 注8
こと

井上上 297
紀上338

白旗をかかげ、白い綬を頸にかけ、自ら
降伏してきた新羅王は、土地の図面と人民の
籍を封印し、曰王船山(1)倭王が乗っている
船のこしらえであらう)の前にかゝりまつた。
新羅王は、
「いまより以後、長く、飼部となつて従い
ます。春秋には、馬梳(馬)の毛を洗うはけ)と馬鞭を献上いたします。云々」と
言つた。
倭王は、その縛を解いてやり、新羅を臣民
とされた。
また倭王は、五船を降りて新羅国の都の内
へ入ると、重宝の府庫を封印し、土地の図面
や人民の籍などの文書をその中に収められた
。そして倭王は、姫がお持ちになつておられ
る矛、皇后の所杖ける矛を、新羅王の門に
樹てて、後葉の印とされた。
その矛は、長らく新羅王の門に樹つ
ていた、という。(神功摂政前紀参照)
こうして倭国は、まづ新羅との戦いにおい

H10.12.6 大陣 平家 陣を張る 2508
H4.3.25(日) 警信 566 西安平果 2508
2521 2531

2522 2510-1/2 2524 2510-1/2
2527 2510-1/2

て大勝利を収めたわけであつたが、
さらに倭国軍は、さらに高句麗を目指し、
海を渡つていった。
朝鮮半島の実権を握つて、百濟や新羅を属
民となつてゐる高句麗を討たない限り、
倭国は、未だ実のところ、新羅を切り取つた
とは言ひ得ないのであつた。
高麗の本隊は、遼東郡の慕容廆の軍と対
峙してゐるというぞ。今こそ退路を断つて降伏
させる好機だ。皆の者、一気に高麗軍の背後
を断つてよ。よりか、為損にみなよ。
倭国軍は、電光石火の激しい勢いで、鴨緑
江河口の西安平果あたりの岸辺に軍船を乗り
上げ、あつという間に、高句麗王の軍を
孤立させてしまつた。
高句麗王は驚愕した。西正面には慕容廆(鮮
卑族)の軍が陣を張つており、そして東方背後に
は、降つて湧いたような倭国の軍がいた。
糧道を絶たれてしまつたら、高句麗軍はた
まらたものではない。このまま、挟み撃ちの
状態で長期戦となることだけは避けなければ
ならなかつた。

上^{のぼ}ってきたのだ。倭国^{わこく}の言^いい分^{ぶん}は何^{なん}なのだ。
 ① 高麗^{こま}の属国^{ぞくこく}であつた新羅^{しんら}が、土地^{とち}の凶面^{きうめん}と
 人民^{じんみん}の籍^{せき}を収^とめて倭国^{わこく}に降^{くだ}つた。(神功皇后^{じんくうこう后}紀)
 ② 倭国^{わこく}は、新羅^{しんら}ばかりでなく、百濟^{くだら}、(百殘^{ひやくざん})
 や加羅^{から}(弁韓^{べんかん})をも臣民^{しんみん}にしたい、と望^{のぞ}んで
 いる。(広開土王^{くわいかいど王}陵碑^{りやうひ}参照)
 といつた趣旨^{しゆし}の情報^{じやうほう}を得^えた。
 高句麗王^{こうこりやう王}は憤慨^{ふんがい}した。
 「何^{なん}という申^{もう}し出^でたし」
 今^{いま}は、躊躇^{ちゆうちよ}している場合^{ばあひ}でなかつた
 遼東郡^{りやうとうぐん}の慕容廆^{ぼくようかい}へ現状^{げんじやう}が伝^{つた}えられ、前^{まえ}に、倭^わ
 国^{こく}へ講和^{かうわ}を申^{もう}し入^いれ、鬼^{おに}にも角^{かく}にも目^め前^{ぜん}
 に迫^{せま}つたこの危地^{きち}を脱^{だつ}せねばならない。
 軍^{いくさ}の陣営^{じんえい}の外^{そと}へやつてきて、
 「今^{いま}後は、なかく西蕃^{せいばん}、(北蕃^{きたばん})というハ
 きであらう」と称^{しょう}して、朝貢^{てうくわん}を絶^たちません」
 と言^い明^{めい}し、降伏^{かうふく}した。
 朝^{てう}廷^{てい}から見て、西^{せい}方^{ほう}に位置^{いち}するの、――

氣長足姪 紀上330^p

日本書紀の編纂者たちはあえて、西蕃と書き改めたように思われる。

こうして、姫は、三つの国に内官家屯倉を定められた。これが所謂三韓である。神功皇后摂政前紀の仲哀九年（二〇〇）十月条参照。

※もとも、継体紀二十三年四月七日条には、心神天皇が朝鮮半島に内官家を置かれたと記されておられ、興味深い。（第1表参照）

ところて、ふつう三韓・馬韓・弁韓を総称して三韓というが、ここでは四世紀に鼎立状態に入った新羅・百濟・高句麗の三国のことと三韓と称している。唐代に唐・新羅で、新羅・百濟・高句麗の三国を三韓と称した例があり、それにならったものである。うう、といわれている。（日本書紀上）日本古典文学大系、岩波書店、三四〇頁注一参照。

ともあれ倭国は、三つから三国（新羅・百濟・高句麗）に内官家屯倉を定めたといふところ、と解さる。（紀参照）

なお、日本書紀の記述（および）土王陵碑から、

紀エ340^P 征韓地略859^P
紀小485(新羅征討) 日本書紀538^P 三韓征伐
Sfile 2534 三韓征伐

2,534^P

正史韓記(聖)21^P
天智 1222

信憑性 1162^P
脱す 2532^P

〈倭国は、一時、百濟・新羅を臣民としたばかりでなく、高句麗における発言権も得た〉
震は其の直後に離反した
ように想像さる。
なるほど、日本書紀の三韓征討の記述に、信憑性が有るのか無いのか定かでない。
つまり、日本書紀の三韓支配の記述が一瞬ながらも歴史を写し取っているのか(2)それとも、歴史的事実とは全く無縁のものなのか(1)といったことを証明するのは甚だ困難である。
その真の歴史の追について、今後の研究に委ねたい。
もつとも、倭国の朝鮮半島に対する政治介入を度外視しては、朝鮮半島の真実の歴史は見えてこないように思われる。
なお、この物語では、あえて従来どおり三韓征討という表現を用いる。
他のどのような言い表わし方にすればよいか分らないからである。

*

収む後3
こと

2.535 P

ニ

白村江
紀下358

紀下495 白村江 1775
征韓 地名 859
2523
663 663
200 331
463 332

●それにしても、何と我が国は、神功皇后の
征韓（二〇〇年）以降、白村江での日本・
百濟連合軍潰滅（六六三年）迄の四六三年
間にもおよぶ長期にわたって、執拗なほど
に海北の朝鮮半島にこだわり続けたのだった
●それは、一体、何故なのだろうか。
●あるいは、もしかしたら、
へ倭人達の心の故郷、中国から、朝鮮半島
の方に向かって、朝鮮半島が長く伸びてい
る
●ということか、——倭国の支配者達の目を
朝鮮半島へ向けさせ、多大の力を朝鮮半島に
注がせた大きな原因だったのかも知れない。
●察するに倭人達は、実は、朝鮮半島のその向
こうの中国の動向にこそ、大きな興味を持
つていたのであろう。
●「中国社会の一員でありたい。中華の流
れを汲む者であることを認めてもらいたい」
倭人達は、そう熱望していたのではなかろ
うか。
●すなわち、倭人達は常に、——朝鮮半島の

紀上339²年

2,536^P 紀上320² ⑤ 2538^{1-3/2}

高句麗に對する。
「神武」

その向こうは13年
どこかで書いておきたい。
ちいといふておきたい。

どうせい 前 向か7 9年
動靜 1572² 向か11 11年
物事つうどき

こう側^{かわ}

向^{むか}で繰^くり広^{ひろ}げられてい^いる中^{ちゆう}国^{こく}人^{じん}達^{だつ}の動^{どう}靜^{せい}に

異常^{いじやう}なまでの注^{ちゆう}意^いを払^{はら}い^いて見^み守^{まも}つていたの

だ^だらうと思^{おも}わ^われる。一^{いつ}挙^{きよ}一^{いつ}動^{どう}をい^いと

●そ^そこで、中^{ちゆう}国^{こく}大^{だい}陸^{りく}と反^{はん}対^{たい}方^{ほう}向^{きやう}に^にあ^ある關^{かん}東^{とう}以^い

遠^{えん}の地^ちの統^{とう}合^{がふ}が、大^{おほ}幅^{はふ}に繰^くれた^とと解^{かい}さ^される^ふ

●↑↑↑こ^これ^れら^らの地^ち域^{いき}へ^への倭^わ国^{こく}支^し配^{はい}者^{しや}層^{そう}の関^{かん}心^{しん}

の低^{ひく}さ^さに^につ^つい^いて^ては、述^のべる^るま^まで^でも^もな^なく^くよ^よく^く知^ち

ら^られ^れて^てい^いる^る

米

補^ほ足^{そく}す^すと^と日^に本^{ぽん}書^{しよ}紀^きは

山^{やま}仲^{ちゆう}哀^{あい}天^{てん}皇^{かう}が薨^{こう}去^{きよ}さ^され^れた^た年^{ねん}の二^に〇^〇年^{ねん}の^の新^{しん}

羅^ら（辰^{しん}韓^{かん}）へ^への^の出^{しゅつ}兵^{へい}と

国^{こく}辛^{しん}卯^{ぼう}年^{ねん}の三^{さん}三^{さん}一^{いつ}年^{ねん}の^の新^{しん}羅^ら・高^{かう}麗^{れい}・百^{ひやく}濟^{たい}へ

の^の出^{しゅつ}兵^{へい}と

の^の二^につ^つの^のよ^よく^く似^にた^た出^{しゅつ}来^{らい}事^じを

〇^〇年^{ねん}の^の条^{じょう}に^にま^まと^とめ^めて^て述^のべ^べて^てい^いる^るよ^よう^うに^に想^{きやう}到^{たう}さ^さ

れ^れる^る。

(*)

2517^{1/2} 寧所 小井314^{1/2} 地人^{1/2} 7.13 落着いてる
 泊瀬の朝倉宮 紀上460, 633 153 2.537^{1/2} - 1/2
 蝦夷 245^{1/2} 魏 284^{1/2}

50 12 12 74
 三国志 II-304 下左から5行
 111 50 国
 113 晋代と 50 国半の 伯済

「平らげる」でない

北を平らぐること九十五國。云々
 かは衆表を服すること六十六國、渡りて海
 大和國泊瀬の朝倉宮から見て西方、中國地方
 夷を征すること五十五國、西へ雄略天皇の
 遑あらず。東は毛人(母人)近畿地方または蝦
 リ祖禰躬ら甲冑を擐き、山川を跋涉し、寧處
 武(雄略天皇)の上表文には、
 「封國は偏遠にして、藩を外に作す。昔よ
 渠帥(指導者)がいらる
 一方、日宋書倭國伝に記されてゐる倭王
 ③「弁辰も十二國からなり、さらにいくつか
 の地方的な小さな中心地があつて、それぞれ
 に渠帥(指導者)がいらる
 ②「辰韓にはもともと六國があつたが、だん
 だん分かれて十二國になつた
 ①「馬韓には五十余國が有る
 ことなかり、こう記されてゐる。
 丸鮮卑東夷伝第三十には、
 参考までに述べると、日三国志の鳥

②539^P 妥当(適切)
云1387^P

2.537^P - 2/2

宋書倭国伝63^{経3}
利表

祖禰 宋書倭国伝65^{経3}

とある。

「あるいは」

宋書倭国伝のこの文は、

「雄略天皇の祖禰(父祖)主として天神

皇を指すか)るのであろう」は、玄海灘を渡

つて、日海北の九十五國を平げた

という文を示しているのかも知れない。

●なお、「昔より祖禰躬ら甲冑を撰き、云々

と記されているのだから、祖禰を雄略天

皇の父もくは祖父一人のみに限定するので

なく、允恭天皇(仁徳天皇)

へ倭国創建以来の先祖達は、躬ら甲冑を撰

き、云々

と解するのが適切であろうと思われる。岩波

文庫(四三七〇)六五頁、注三参照

*往古の倭国流の襲名式の儀式の考え方に

よれば、

へ倭国を建国した倭王以降、正当な血筋を

受け継ぎ、王位を継承してきた倭王武の直

系の祖先達は皆、父に相当する

ということになる

*

前頁6行
注! 2534¹・8行へ
のかを知らぬ

三国史記(2) 270頁
高麗に、14の羅 康州

2,538^P - 1/2

95
- 74
21

50
12
74

かろ 加羅 251¹ 馬韓(百濟) 辰韓(新羅)
2520¹
2537¹ - 1/2

さて、もしも仮りに、辛卯年(三三一)頃
百濟(馬韓)に五十国
新羅(辰韓)に十二国
加羅(弁辰)に十二国
があつたとすれば、これらの国の合計
は、七十四国となる。
次に、海北の九十五国から、七十四国を差
引くと、答は二十一国となる。
なみほど定かでないが、
「高句麗」には、二十国ばかりの国々があつ
た。
というところのかも知れない。
尚、日狗邪韓国(一)国が、海北の九十五国
の内に含まれるのかどうかについては、分
らない。
國ともあれ、一時的にせよ、
へ倭国は、海北の朝鮮半島のほぼ全域に散
在す。九十五国を平定した。
ように見受けられる。

H30(2018)6.24(金)~6.25(土) 40元(2019)7.10(金)~7.12(日) 40元(2020)2.17(火)~2.18(水) 40元(2020)7.1(日)~7.4(水) 2509R1/2~4頁
 393 2542 2,538^{P-2/2}

中でも、一番遠くに位置してゐる高句麗に対しては、倭国の目も届きかねたのであろう。
 高句麗は、すぐに倭国から離反してしまひ独自の道を歩み始めた。と想像される。
 次章において述べたい。

百済国王の挿げ替え
 すでに述べた通り、辛卯年(三三一)以後

の間に倭国に擁立されて、箕子の子孫の高句麗国王と、遼寧系殷民の百済国王とは、男王の系統が異なる結果になった。
 (第二章) 国王の挿げ替え
 箕子の子孫の高句麗国王と、遼寧系殷民の百済国王とは、男王の系統が異なる結果になった。
 (第二章) 国王の挿げ替え

おいて既述第一巻末尾の年表参照)